

山田小学校だより (Metamorphose)



文責 校長 谷川晴峰

私の分岐点・・・それは一人のアメリカ人との出会い！

Konichiwa, Seiho!

This is David Kadavy, the exchange student that visited your nice family in 1979! I found someone on Facebook (Mr. A F) in Hakata who knew your family and he helped me find you. I still live in Denver and hope to return to Ikitsuki someday.

今年になって、様々な予期せぬ再会がありました。(子供さんにも、分かるように、お伝えください)
夏休みも終わろうとしている頃、上記の電子メールが届きました。差出人は、アメリカ在住の David Kadavy氏でした。彼は40年近く前に、AFS (アメリカン フィールド サービス) という国際的な留学組織から、「県立猶興館高校」に派遣された高校2年生でした。

当時の私は、大学を中退し定職にも就かず、漫然とした日々を過ごしていました。確固たる夢や希望も無く、漠然と「アメリカにでも行って、英語を学ぼうかな」ぐらいの、いい加減な思いしかもっていませんでした。しかし、留学するとなると・・・必要なものは、お金です。無職の自分に、そのような資金はありませんでした。そこで、考えました。どうすれば、最低限の投資で、最大の効果を上げられるのか？インターネット等の便利な検索手段は皆無でしたから、頼りになるのは、英語学習や留学に関する書籍のみでした。手当たり次第に購読し、隅々まで読んでいくうちに、「アメリカからの留学生(高校生)を、受け入れてくれる家庭を募集中」という記事を発見したのです。「自分が行くより、向こうから来てもらおう」という発想の転換でした。

猶興館に出向き、事の経過を説明したものの、「前例がありません」と断られそうになりましたが、様々な方々の御協力のおかげで、留学生受け入れが実現することとなりました。少しだけ自分の思いが叶い始めましたが、それなりに受け入れ準備は大変でした。

彼は全く日本語が話せませんでしたから、家族総出で簡単な英会話や日常的に使用頻度の高い英単語を覚え、トイレを和式から洋式に変え、それなりに万全の態勢を整えました。そして、夏休みが始まると、長身の彼が我が家にやってきました。当時の生月町には、外国籍の方は滞在しておらず、周囲の人々も驚いていたようでした。刺激的な日々の始まりでした。

下の写真を御覧ください。懐かしいですね！「フェリー生月」の雄姿です。まだ、生月大橋が無かった時代です。猶興館高校の一員になったデビッド君は、私の弟と一緒に、凧の日も時化の日も、楽しみながら通学していました。京都への修学旅行も、満喫することができました。

日本語も交えながら、約3か月間の滞在でしたが、この経験が私に「使える英語を身に付ける必要性」や、「国際的視野をもつ重要性」を教えてくれました。彼との出会いが無ければ、私は英語を学ぶことも無く、教員になることもなかったと思います。

山田小学校の子供たちにも、国際的な視野と大胆で緻密な「考動力」を、是非とも身に付けてほしいと、切に願っています！（世界を視野に！）



フェリー生月と安満岳

1991年7月31日に平戸島と生月島を結ぶ生月大橋が開通するまで、【島民の足】でした！